
どうでもいいです。

松嶋ネコヂロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうでもいいです。

【著者名】

Z3484P

【作者名】

松嶋ネコチロウ

【あらすじ】

些細なことで上司を殴り、会社を飛び出してしまった男のそれもかな一事。

「ほんとっ、お前つて常識ねーのな。やっぱあれだな、カエルの子はカエルつーか。カーチャンに似てんだろうな、お前つて」
ええ、俺が悪いんです。出先で重要書類を間違つてケンタのゴミ箱に突っ込んできたなんて、いまだ小学生でも吐きません、そんな言い訳。

でも一応探したんだよ、書類。相手先から受け取つた設計図書だつたか契約書だつたか。俺もそれ的重要性は分かつてゐつもりだつたんだけど、なにしろ昨日は残業で朝方まで起きつぱなしになつたし、そんな身体でケンタの油つこいチキンをもしゃもしゃやつてたら気分が悪くなつたんだ。思考も正常さを失つてたわけ。それで、トレーニングクリスマス広告と一緒にポイ。帰社するため、吐き氣を抑えながらプラプラ歩いて四十分、ようやく気づいた。

あれ、俺、あんとき捨てちまつたかもしんねえ。

急いで戻つたときにはもう遅い。店員が、「ゴミならもう回収しましたよ」と言つ。もちろん俺は、じゃあそのゴミ袋の中身改めさせてくれつて詰め寄つた。そうしたら店員は申し訳なさそうに外に向かつて人差し指を突き立てるんだ。店員の指示する方を見て、俺はびっくりし過ぎて胃の中のチキンを噴射してしまつてころだつた。ゴミ収集車がのろのろとケンタの前を発車しているところだつたのだ。ちょ、ちょ、ちょ、と俺の舌は回りきらなくて、それでも足はつんのめりながらも前へ出た。

「まあてい！」

時代劇の主役さながらに台詞を発した。そこでゴミ収集車が止まつてくれればいいのだけど、俺の声が届くわけもなく、仕方なく俺は全身に脂汗を垂らしながらそれを追つた。

そして、俺はしょんぼりしながら会社に戻ることになる。満面の笑みで俺を迎える次長に事の成り行きを説明すると、一変、次長は

さつと表情を無くしてこう言つたのだ。

「お前、ちょっと来い」

やべえ、ボコボコにされる。

てめえ無くしたんなら正直に言えよワケわかんねえ嘘吐いてんじやねえお前の顔面をお弔さまにしてやううか、つて。顔面をクレーターだらけにされたと思ったんだ。

でも、現実は甘くはなかつた。現実は思つたより手痛い傷を与えてくれるのだ。

次長は俺を無人の会議室に連れ込み、彼はパイプ椅子にどつしりと腕組みして座り込んで、そして俺の人間性やその他欠点をチクチクと攻撃してきたのだ。

これならば、殴られたり踏みつけられたりした方がマシと言つものだつた。

まあしかし、それだけならぎりぎりで耐えられようと言つものだ。

俺の母親をタネに嫌味を言われるまでは。

「そもそもお前よくこの会社に入れたな。大学は早稲田だつけ？
お前のカーチャン、相当身体汚したんだろうな。ナハハ、お疲れさま」

ナハハ、と笑いつつも、次長は蔑んだような目色で俺を攻撃した。
俺も正直、母のことは尊敬していない。むしろ嫌いだ。

若い頃は「風俗つて、チヨー稼げるじやん」と言つて家族を傷つけるし、父には離婚を言い渡されるし、離婚しようというときには息子である俺の親権を訴え、そして言いくるめ、俺はあえなく母に連行されるように家を去つた。今でも母は懲りずにキヤバクラで働いている。いい年して化粧はケバケバだ。

そんな母とは180度違う人生を送りたかったから、俺は必死に勉強して大学へ行つた節がある。母に似て頭の悪い俺だったが、それはもう死にもの狂いで勉強したのだ。

「勉強なんて社会で生きていいく上ではなんの役にも立たないのよ」という母のとち狂つた教育理論を無視して。

早稲田に合格したとき、俺は勝った、と確信した。何と戦っているのか分からぬが、それでもあの瞬間、勝利を味わつたんだ。そして俺は、この大手の企業に就職した。まさに母とは違うエリートコース。まさに、ざまあみろ、という感じです。

この前母が、「あなたの上司、うちの店に連れてきなよ。最近指名がとれなくてさあ」と臆面もなく言った。生活費に関わる問題なので、仕方なく次長ら一行をドランクエの仲間のように背後に携えて母の勤めるキャバクラへ案内したのだ。

母は、次長らに俺の幼少時代の恥部を語り、ネタにした。俺は赤面して縮こまりながら、皺を隠しきれていない母の頬を流し見た。俺の若気の至り話より、むしろ母の存在の方が恥ずかしかった。「ほんと恥ずかしい息子ですけど、これからもよろしくお願ひしますね」

あんたのが恥ずかしいよ、クソババア。

そう、俺は見下していたはずなんだ、母という人間を。

そして今、次長は嘲笑を交えながら、俺の母親のことを小馬鹿にしている。次長の突っ込みがあまりに的を射ているもので、俺は共感しつつ「「」もつとも、「」もつともでござります」と申し訳なさそうに頷いた。共感してやると次長はだんだんと調子づいてくる。毒舌ぶりにも脂が乗ってきた。

俺はへらつきながら身を屈め、革靴を片方脱いだ。

「本質的にはクズなんだよ。お前ら母子は」

「えへへ、えへへ」

俺は革靴の裏を思い切り、次長の幸薄い頭上に振り降ろした。パカーン。間抜けな音が鳴つて、次長が驚嘆し目を白黒させた。

「俺の母ちゃんが何だつて！？ もういつぺん言つてみろ、殺すぞこらあ！」

次長の胸ぐらを掴んで頭をパコパコしばくと、次長は口をあんぐりと開けた。その表情がカエルみたいで妙に笑えて、次第に俺はパコパコしながら高笑いをしていた。そのうち同僚や先輩が入ってきて

たので俺はパコパコを止め、それでも笑いが止まらず、彼らを振り払いながら会社を飛び出した。

ゲラゲラ笑いながら全速力で駆けていくリーマンを見て、通行人はどう思つただろう。きっと頭のハジけた奴だと思ったに違いない。

気づくと、俺は見知らぬ駅に座り込んで旅行のパンフレットを眺めていた。駅構内の旅行代理店の店頭のパンフだった。手にしていたのは世界一周旅行と銘打たれたパンフのある一ページ。アラブだつた。俺はひそかに石油王にでも憧れていたのだろうか、と首を傾げる。

旅行代理店のガラスには俺の顔が映つていて、ぞつとするほどの能面をしていた。完全に素面だ。

立ち上がり、周りを見渡す。やはり俺の知らない駅だ。ただ人通りは多く、どうやら俺は辺境じみた駅に来たわけではないと知る。駅は高架橋によってデパートなどと地続きになつており、橋の上では路上演奏やダンスパフォーマンス、ティッシュ配りや売り込みなどが盛んに行われていた。

秋にも関わらず人の熱氣でむせ返るようだったので、俺は背広を脱いで手に持つた。

携帯を見ると、会社や同僚らからの着信が十数件入つていた。嫌気がさす。現代の日本人は携帯電話に支配されている気がする。会社の上司が休日出勤を命じると決めれば、たとえホテルで女とセックスしていよとも呼び出せる。恋人など作つてしまえば携帯について二十四時間彼女に監視されてしまうという条件付き。そんな役目まで負わされる携帯電話は可哀想だ。

だから、今日だけはおやすみ。俺は電源を切り、ポケットに仕舞いこんだ。ついでに全身のポケットというポケットを探つて持ち物を確認してみる。

俺が持っていたのは財布と携帯ぐらいだった。バッグは会社に置いてきてしまったようだ。

さて、これからどうしようかしら。

まずはカラオケに入つてストレスを発散しようと思った。六時間ヒトカラしてくたくなつてやう。けれど俺はあまり歌を知らず、五十分で曲が尽きてしまつた。その後、一人ボウリング、一人ネットカフ、一人焼肉としゃれ込んでみたけれど、どれも楽しくなかつた。コンビニでジャンプを立ち読みすれば先週号を読んでいなかつたことに気づいて、あまりのつまらなさに俺はその場で地団太を踏んだ。ちら見していく周りの客を睨み回しながら、俺は駅の高架橋へと戻つた。

ホームレスが一人、新聞紙に丸まつて眠つていた。ホームレスの前には週間雑誌や漫画雑誌が並べて置かれており、空の缶詰が二、三個置かれていた。これで路上販売をやつているつもりなのだろうか。

はたと、俺は目を見張る。先週号のジャンプだ。手にとつて見ると、やはり間違いない。慌ててホームレスのおっさんを叩き起こす。「ああんだ?」「これ売つてくれ」「あ? ああ」

ホームレスのおっさんは大儀そつに上半身を起こし、胡座をかけて首のあたりをボリボリとする。彼は無言で指を三本立てた。

「三百円か?」

「ばーるー。三十万だ」

フリー・ザが自らの戦闘力を明かしたときのような衝撃が走つた。けれどおっさんはフリー・ザではないので、このまま蹴りを入れてジャンプを奪い去ろうかと画策する。

するとおっさんは顔面土砂崩れのように破顔して笑い、どんどん俺の肩を押した。

「うそうそ。三千円で売つてやるよ」

俺はほつと胸を撫でおろした。何だか騙されてる気がしないでもないけど、俺にとつて読み逃したジャンプは充分三千円の価値があ

る。おっさんはお礼を言い、財布を取り出した。財布の中身を見て、愕然とした。千円と少ししかない。キヤッショカードも、会社のデスクのカードケースに入れられたままだ。

おっさんにそれを告げると、おっさんは激怒して俺の胸ぐらを掴んだ。

「冷やかしか、てめえ」

「すんません。もう買つのです」

「駄目だ、さつきてめえは買つと言つた」

「でも、金ないつす」

おっさんは黒くすすけた顔で俺を睨み据えた。所々抜けた歯並びを剥き出しにさせる。野獣のような臭い鼻孔をつく。

「とりあえず千円よこせ」

「は、はい」

おっさんは俺から千円をふんだくり、日の光に透かして野口の絵柄を眺める。それから俺をじろりと見た。

「残りはバイトで払つてもいい」

「バイトすか

おっさんはそのまま言つと、風呂敷に雑誌類を並べて包み、腰を上げた。

「来い、もつと人の多いところに行く

すたすたと軽い足取りで歩いていくので、俺は慌ててジャンプを脇に挟み、おっさんを追いかけた。

おっさんは先程の千円札を券売機に入れ、切符を買ってさつさと改札口へ行つてしまつた。俺も残り少ない小銭をはたいて切符を購入する。

おっさんは電車の座席に腰掛けすると、渋谷に着いたら起こせ、とだけ言つてうたた寝を始めた。電車のドア上部に貼られた路線図を見ると、このまま乗れば渋谷に着くらしいことは分かつた。そのまま逃げることも出来たが、今度おっさんに街で出くわしたらぶん殴られる気がしたので、大人しくおっさんと対面する座席に座つて渋

谷に着くのを待つた。

渋谷の一駅前でおつさんを起しそうと近寄ると、おつさんは俺の近寄る気配だけで跳ね起きた。野生動物並の反応レベルだった。

おつさんは渋谷の駅前で風呂敷を広げ、せりあと同じじょうな古雑誌露店を開く。俺が手ぶらで突っ立っていると、おつさんは一言、集客しろ、と命じてきた。戸惑い、まごついしていると、おつさんが俺のケツに蹴りを入れてくる。

「早くしゃがれ！」

そこいらのチンピラよりも凄みのある形相だった。俺は仕方なく、イベント会場のスタッフばかりに声を出した。

読み逃した雑誌は「ございませんか。先週号、先々週号のジャンプやマガジン置いてます。一部三千円でござります。

しばらく続けたが、来るのは余所余所しさを含んだ視線ばかりだった。人は異質を本能的に避ける生き物である。そして俺たちは今、完全に異質だった。

何やってんだろ、俺。やがておつさんが苛立つたように後ろで舌打ちをしてくる。

「おい、三千円は高すぎる。二千円に下げよ！」

「え、でも俺は三千円で売られましたよ」

「屁理屈言つんじゃねえ。ちつともしろ」

それから一時間ほど続けたが、結局一冊も売れなかつた。おつさんはまた雑誌を風呂敷に包み、次の場所へ向かうべく立ち上がつた。バイクはまだまだ続くようだつた。その後俺は露店に出たための雑誌をコンビニの「ミニ捨て場で捨て、それから道に落ちているアルミ缶を集めさせられ、そのアルミ缶を売つてこいと言わされたので業者に売つて小銭を稼いだ。コンビニ袋三つをこいつぱいにしたのに、百五十円しか貰えなかつた。

「金を稼ぐのは大変だろ？」

おつさんは、職場体験を終えた中学生に向けるような言葉をかけてきた。俺は額にかいた汗拭い、無言で頷く。

おっさんはそんな俺の背中を叩き、ガハハ、と笑った。

「おっといけねえ。今日は豚汁を食えるんだつた」

おっさんはまた歩きだした。行き先を問うと、日比谷公園だ、と彼は答えた。歩いていくつもりらしい。直線距離では三キロくらいだろうが、なにしろ東京の道は入り組んでいるので体感ではもっと距離を感じることだろう。日は傾き始めていたが、存分に全身の水分をカラカラと奪ってくれた。背広を腕に持ち直し、汗まみれの脇にジャンプを挟み、俺はネクタイを緩める。おっさんの後ろ姿が霞んで映るようだつた。ああ、ほんと何やつてんのよ俺。

日比谷公園へ着く頃にはもう夕方になつていた。俺は疲弊し、肩で息をしていたが、おっさんは表情一つ変えていなかつた。ホームレスというのはつくづく生命力の強い人種だと思つ。

公園では、行政の支援団体らしき集団が長机を並べ、ホームレスたちに豚汁を配つていた。おっさんは豚汁をすすりながら知り合いのホームレス数人に声をかけていた。俺は豚汁を抱え、彼らと少し離れた木の根本に腰掛けた。

おっさんたちが談笑し、ときには情報交換をする姿が、会社の同僚たちの姿と重なる。まとまりのない無法者だと思っていた彼らにも、こうして彼らなりの社会が形成されているのだと気付く。彼らだって、生きるために必死なんだ。社会から逃げ出した俺と比べると、彼らの方がより社会人然としている気がした。

俺は下を向き、猫背になりながら豚汁をすすつた。俺の口にはいつの間にか砂がこびりついていて汁がざらざらとしたけれど、あまりの美味しさに涙が出てしまった。実際、少し出ってきた。ぽろりと落ちたそれを皮切りに涙腺が決壊して、たちまち嗚咽で豚汁が喉から逆流し、俺は盛大にせき込んだ。その拍子に豚汁を地面にぶちまけ、それがまた悲しくて悲しくて、俺は地面に転がりながら「豚汁食いてえよお」と幼児のように大泣きした。

情けなくて、惨めで、きっと俺は社会で生きていく才能はないのだろうと、悔しくて仕方がなかつた。

ふと、俺の頭の上に手が置かれる。野獣のような臭いがした。涙で滲む視界を押し上げると、微笑むおっさんが俺を見下ろしていた。

「俺のやるからよ、泣くんじゃねえ」

おっさんの優しさにまた泣いた。ジャイアンの法則である。性悪な奴がたまに見せる優しさは胸を打つものだ。おっさん、それは卑怯だよ、と俺は泣き喚いた。おっさんは無言で公園を出ていった。十分ほどで戻ってきたおっさんの手には缶ビールが一本握られていて、一本を俺に差し出した。

おっさんと一緒にビールを煽り、豚汁を水のように喉に流し込む。その味は舌の上でどしまらず、全身を濃厚に駆け巡るようで、ここまで旨い酒の呑み方を俺は知らなかつた。ビールと豚汁をたいらげて息を吐くと、俺はすっかり酔つてしまつていた。

「もう帰つていいで。お前は十分働いてくれた」

おっさんが赤い顔で微笑む。嫌だ、もう一日ホームレスやりたい、俺が言うと、おっさんは静かに首を振つた。

「家があるもんはホームレスやつちやいけねえんだ。帰れ」

おっさんが地面に落ちていた先週号のジャンプを差し出す。

「帰らねえと、これはやれねえな」

俺は逡巡したが、黙つてそれを受け取つた。ホームレスは楽しかつたけど、やはり先週号は読んでおきたかつた。俺とおっさんの絆などそんなものだ。俺は、自分と社会との繋がりの薄さを再確認しつつ、帰路へ着いたのだった。

ああ、無情。

家に帰ると、母が布団に横になつていて、盛大にいびきをかけていた。家の電話には留守電が十七件入つっていた。全部会社からだつた。その電話番号に掛け直すと、次長の大激怒が耳をつく。

辞めます、それだけ言つて、俺は受話器を置いた。

母のいびきを聞きながらジャンプを讀んでいると、母がのつそりと起き上がり、目をこすつた。

「ああ、おかえり」

「ただいま」

「それ、先週号のジャンプ?」

「うん」

「マジで。読みたかったんだよね。読ましてよ

「うん」

母が差し出す手を、俺はじっと見つめた。所々ひび割れた苦労人の手をしていた。おれはあのホームレスのおっさんを思い出した。はやくはやく、とその手が揺れる。俺は母の手を見据えた。

「ねえ」

「何よ、早く読ませて」

「今日、会社辞めてきた」

「あつそ」

早くよこしなさいよ、と言わんばかりに俺の手からジャンプを取り上げる母。やっぱいい加減だな、この人。

手ぶらの俺は仕方なく母がジャンプを読む姿を眺めた。母は巻末のギャグ漫画を読み、大口を開けてげひやひやと下品に笑う。

そんな母を見ると、俺の怒りや悲しみなど、その他もうろの悩みの全てが宇宙のちりのようにどうでもいいことのように思えてくる。俺は母と同じように、げひやひやと笑った。

「明日からちゃんと就活しなさいよー」

「おー」

どうでもいいです、どうでもいいです。

オリジナルのリズムを口ずさみながら、俺は窓越しの夜空を見上げた。

(後書き)

ドラマもなければ伏線もない、たまには「ううのもいいかなって思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3484p/>

どうでもいいです。

2011年7月22日03時42分発行